みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第790号（通巻1294号）

# 東京YMCA

3
2022


創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
Tel 03-6302-1960
URL http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

**東京ＹＭＣＡの使命**　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

# 子育てで大切にしたいこと
## 汐見稔幸さん オンライン講演会

汐見（しおみ） 稔幸（としゆき）さん

東京大学名誉教授、白梅学園大学名誉学長、日本保育学会理事（前会長）、全国保育士養成協議会会長。NHK E-テレ「すくすく子育て」 など出演。『エール　イヤイヤ期のママへ』（主婦の友社 2021年）ほか著書多数。

ＮＨＫの「すくすく子育て」等でお馴染みの汐見稔幸さんが１月29日、第16回東京ＹＭＣＡ子育て講演会で「ポストコロナ・これからの時代に向けて！子育てで大切にしたいこと」をテーマに講演。子育て中の保護者や保育士など４１４人が参加しました。

汐見さんは、今の子どもたちが社会人になる２０３０年以降を見据えながら、ＡＩ社会やＳＤＧｓが課題となる中で人間らしく生きていくためには何が大切なのか。どんな子育てが必要なのか。幅広い視点から子育ての留意点を話されました。温かな人柄と穏やかな語り口に視聴者からは「勇気づけられた」「お話の一つ一つが心に響いた」など多くの声が寄せられました。

今回は感染対策のため、動画配信によるオンデマンド形式で開催し、視聴期間も２週間としたところ「自分の好きな時間に聴けてよかった」「途中で中断しても聴き直せてよかった。何度も繰り返して聴いた」など、好評でした。

この「子育て講演会」は、楽しく幸せな子育てをしてほしいとの願いから、東京ＹＭＣＡの会員・職員有志の企画運営によって無料で開催しているもので、今年で16年目となりました。今回も多数の企業・団体に協賛をいただいて開催できましたことを感謝して報告します。（＝４面「協賛一覧」）。

（広報室）

芋ほり（江東YMCA幼稚園）

### 汐見さん　講演要旨

子育ての原則は、
①子どもの今を輝かせ、充実させながら、
②子どもの未来にむけての準備をする、ことです。

たくさん遊んで充実した日々を重ねること。遊びの中で頭を使い、友だちと協力し、忍耐力なども身につけ、結果として未来の準備ができていく。それが原則です。早期教育に力を入れすぎて、未来の準備を優先させると、大人になってから伸びなくなってしまいます。だからといって将来を考えなくていいわけではありません。将来を見据えながら子どもの今を輝かせるのが大事です。

今の子どもたちが社会人になる２０３０年～２０４０年頃は、ＡＩ社会でしょう。人工知能が人間に代わって働く社会です。人間は自分で考えなくてもよくなり、自然や他者と直接関わる必要もなくなる。人が創りだしてきた技、手仕事の文化も失われるでしょう。

そんなＡＩ社会で、人間らしく喜びをもって生きるためには、これまで人類が変わらずに大事にしてきたことを、あらためて大事にしていく必要があります。たとえば土を耕して野菜を育てること。みんなで協力し、自然の恵みに感謝して収穫すること。そんな五感を使った体験がこれまで以上に大切になります。

未来社会のもう一つの特徴に、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）があります。環境問題や貧富の格差を今のままにしては誰も幸せにはなれません。価値観を変えなければならない。そのためには正解を覚えていくような教育でなく、自分たちで解を導き出していく力が必要です。自分の意見を言う。討論する。幼少期から子どもの意見を聞き、自分で考える力を養っていかねばなりません。

同時にこういう時代には、競争ではなく共生・共感の力が大事になります。勝つことは必要ありません。人は弱い存在だと自覚して協力すること。励まし、励まされながら生きていくことこそが大切です。

こういった未来を見据えながらご家庭では、子どもを思いっきり遊ばせ、何かに没頭する時間を見守ってあげてください。またコロナで在宅時間が増えたこの機会に、一緒に食事を作る、近くの山に登るなど、何か温かく家庭らしい、小さな文化を創るよう努めてほしいと思います。そういう営みの中で子どもたちの「今」を輝かせていくことが、未来社会を人間らしく生きるために必要なことだと考えます。

### 視聴者アンケートから

●幼稚園で、周りの子どもたちが読み書きできるのを見ると、我が子にも教えねばと焦っていましたが、何かに没頭して集中する遊びを大事にしたらいいんだと学び、はっとさせられる思いでした。

●「人生は競争ではなく、共生です」という言葉にとても共感しました。

●就学を控え、これからどう子育てをしたらいいか不安に思っていたため、とても有意義でした。子どもを一人の人間として接する。「どう思う？」と聞く関係をすぐにでも始めようと思います。

●人として生きる喜びを子どもに伝えていくことが、ＳＤＧｓにつながっていくこと。それが今まさに必要とされていることを理解しました。

●勉強よりももっと大事なことがたくさんあると気づけたことは大きな収穫です。

●非常に幅広い視野で子育ての話が聴けてよかった。目の前の困り感を俯瞰（ふかん）して考える、示唆に富んだ内容でありがたかった。

### 赤▽三角

今年１月、韓国の宗教哲学者・池明観（チミョンガン）さんが97歳で亡くなった。１９７２年から約20年間、日本に亡命しながら韓国の民主化運動に携わった方である。「Ｔ・Ｋ生」という匿名を使い、軍事独裁政権下の韓国の実情を岩波書店の月刊誌「世界」に連載して告発したことで知られる▼私にとって池先生は、学生時代の恩師だった。社会心理学者エーリッヒ・フロムの著書『正気の社会』を教科書に、平和で民主的な生き方を教えられた。当時は先生が「Ｔ・Ｋ生」だとは知らなかったが、その講義には心を打つ力があり、学生たちは先生のサインを求めて長い列を作った▼先生は、私がＹＭＣＡに就職したことを喜んでくれた。ＹＭＣＡは国際交流によって平和教育を行なってきた。そういう「市民の力」が大切なのだと▼けれども今、ウクライナの悲劇を前に、一体ＹＭＣＡに何ができるのだろう。香港でもミャンマーでも、独裁政権に苦しむ人たちがいる。民主的で平和な世界がゆらぎ、政治の力にも限界が見える。やはり最後の砦となるのは「市民の力」なのだろうか。講義に託された池先生の切実な思いが、懐かしさと共に思い返される。

（広報室　高田京子）

# ピンクの服で　いじめ反対

## 全国で“ピンクシャツデー”

ピンクの服を着ていじめ反対をアピールする「ピンクシャツデー」が今年も２月２３日、２月第４水曜日に全国ＹＭＣＡで開催されました。コロナ禍のため、大勢で集合写真を撮るようなイベントはできませんでしたが、各地でそれぞれに工夫しながら、いじめを考える取り組みが行なわれました。東京ＹＭＣＡでの取り組みをご紹介します。

**●東京ＹＭＣＡ高等学院**

「ストップいじめ！ナビ」弁護士チームの金子春菜さんと足立悠さんを講師に招いて2月18日、特別授業を行ないました。「合唱コンクールの練習にいつも遅刻してくるＣさん」が徐々に仲間はずれにされていくという事例をもとに、まずはグループでディスカッション。その後講師からは、Ｃさんが遅刻をしたか否かによらず、Ｃさんが心身に苦痛を感じていたらいじめだということ、またいじめを重大化させないためには「傍観者」の役割が大きいことなど、いじめの法律と解決策を学びました。

（高等学院　原田慧太）

**●東陽町コミュニティーセンター**

2月21日～27日、「みんな、ちがっても楽しいね」というタイトルで、いじめに反対するピンクシャツウィークのイベントを実施しました。神戸大学大学院国際協力研究科教授で元広島ＹＭＣＡ国際部主事のロニー・アレキサンダーさんが書いた「ポーポキ、友情って、なに色？」というピースブックを題材に、来館する子どもたちに「友情って何色かな？」とたずね、選んだ理由を色紙に書いてもらいました。「心が暖かくなるから暖かい色にした」「明るい平和の色にした」などのメッセージが寄せられ、一匹のポーポキという白い猫を思い思いの色紙でカラフルな猫に変身させました。また、仲間はずれにされたネコがみんなと仲良くなっていく絵本「ポーポキのおはなし」のＤＶＤを読み聞かせと共に上映し、みんな違っても楽しいのだということを伝えました。　（東陽町コミュニティーセンター　木村卓司）

**＜報告＞東日本地区スタッフ研修会**

## 「集める人生から散らす人生へ」

山手コミュニティーセンター　**杉田 裕樹**

１月25日～26日、「東日本地区ＹＭＣＡスタッフ研修会」がオンラインで開催され、東日本の10ＹＭＣＡから23人の職員と7人の総主事が参加。古賀博牧師（日本基督教団早稲田教会）による「キリスト教理解」、平田真基さん（ＮＰＯ法人ほっとプラス代表理事）による「生活困窮者支援の実際」、在日本韓国ＹＭＣＡ主事による「２・８独立運動について」など、さまざまな視点から学ぶ機会をいただきました。

なかでも印象に残ったのは、古賀牧師が語られた「散らす人生」という言葉でした。与えられた時間、財産、能力などを自分のためだけに使う「集める人生」ではなく、それを他者のために使うのが「散らす人生」です。古賀牧師は東京ＹＭＣＡの職員研修でも講師をされているため、私は20代の時にもこのお話を伺ったことがありました。ＹＭＣＡのスタッフとして、子どもたちや地域のために「散らす人生」を生きるというお話しに当時も感銘を受けましたが、30代となった今回はそこに「共に働くＹＭＣＡの仲間」が含まれることに気づきました。若いスタッフも増えてきた今、ＹＭＣＡで働く意味や想いを伝えていかねばならない立場になったこと、学ばせていただいたことを自分だけのものにせず、仲間に対しても身をもって「散らす」必要があることを感じました。

オミクロン株が猛威をふるう中、オンラインの研修ではありましたが、東日本地区の仲間たちと共に学び、語り合い、想いを共有できたことに感謝しています。参加させていただき、ありがとうございました。

# 平和を求める人と連帯して

## ウクライナ緊急支援募金

2月24日の侵攻以来ウクライナＹＭＣＡは、爆撃から逃れる市民を受け入れるなど支援活動をしています。またポーランドやスロバキアなど周辺諸国のＹＭＣＡは避難民に対し、宿泊や食事・日用品を提供するなど、生活支援に奔走しています。

これを受けて、各国が加盟する世界ＹＭＣＡ同盟およびヨーロッパＹＭＣＡ同盟は2月25日「世界の仲間との連帯」を呼びかけ、「ウクライナとロシア、双方のＹＭＣＡと連絡をとりあいながら人道的な支援をしていく」と声明を発表。日本ＹＭＣＡ同盟は、日本国内にいるロシアの留学生等にも配慮しながら「平和を求める人と連帯していく」とし、国内各地で募金を開始しました。

### ウクライナＹＭＣＡと東京ＹＭＣＡとの交流

1986年にチェルノブイリ原発事故を経験したウクライナＹＭＣＡは平和への関心が高く、2002年に「原因こそ異なるが被爆国である日本と交流したい」と日本に連絡があり、交流が始まりました。2004年には「平和と生命」をテーマに両ＹＭＣＡで絵画コンテストを開催。2006年には東京から3名がウクライナを訪問。その後も毎年クリスマスカードやプレゼントを交換しています。

一日も早い平和の訪れを願い、ＹＭＣＡができる支援を実施してまいります。
ご理解とご協力をお願いします。

【送金先】
◇みずほ銀行　神田支店（108）普1123669　公益財団法人東京ＹＭＣＡ
◇郵便振替：　00120-7-714728　東京ＹＭＣＡ会員事務局
【募金締め切り】2022年4月30日まで
【お問い合わせ】東京ＹＭＣＡ国際部（電話：03-6302-1960）
詳細はホームページをご覧ください。
http://tokyo.ymca.or.jp/

**西東京コミュニティーセンター**

## 一部活動の終了と新たな展開にむけて

西東京コミュニティーセンターに2016年に開所した放課後等デイサービス「ＰＩＴ国立」を、2022年3月をもって閉所することになりました。地域ニーズへの応答として開始したものですが、周辺に同業サービスが増えたこと、また事業運営の原資となる行政からの報酬の減額改定が相次いだこと等で大きな不採算が生じ、継続的な運営が困難となったためです。

合わせて、知的障がいのある方々の定例活動「あおぞら・つばさの会」「シャベルズ・いづみの会」も、ユースボランティアリーダーの確保が極めて困難になったこと等により、３月をもって活動を終了することになりました。何とか継続できないかと検討を重ねてまいりましたが、やむなく終了となりました。開始から約40年、メンバーや保護者の皆さん、そして活動を支えてくださった多くのリーダーや会員の皆さんにはこれまでのお支えに心からの感謝を申し上げます。

西東京コミュニティーセンターは、1955年に三鷹駅近くに誕生した「武蔵野ブランチ」と1976年立川駅近くに誕生した「立川センター」を前身とし、野外活動や障がい児・者の活動などを展開している地域活動センターです。４月以降は引き続き「音訳ボランティア　シジュウカラ」や「のどトレ教室」など既存の会員活動が継続されます。また、定例野外活動やキャンプもこれまで同様にこのエリアの子どもたちを対象に展開されますが、基幹事業であった「ＰＩＴ国立」等の閉所後、これからの西東京コミュニティーセンターの姿をどう描くかを会員の皆さんと共に考えていきたいと思っています。ユースが活き活きと輝く場、地域に必要な奉仕とこれからもＹＭＣＡらしい働きが展開される場として、この地でどんな新たな取り組みができるか、あらゆる可能性を探りたいと思います。

すでにさまざまなご意見やご期待をお寄せいただいていますが、ぜひ多くの方々に遠慮なくお声をお寄せいただきたくお願いいたします。そのような場や機会を設けることも検討を進めてまいります。

引き続きご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

ご意見などは本部事務局星野宛にお寄せください
電　話：03-6302-1960
メール：koho@tokyoymca.org

## 感謝報告　コロナ禍のバングラデシュより

# 235世帯へ食品配布　家庭学習も実施

コロナ禍による影響が深刻なバングラデシュＹＭＣＡへ、東京ＹＭＣＡは昨年９月に１２０００ドルを緊急支援募金として送金しましたが、このたび現地より活動レポートが届きましたのでご報告します。

バングラデシュＹＭＣＡはもともと、貧困のため学校に通えない子どもたちを対象に「働く子どもたちの学校（ＮＦＰＥ）」を運営していますが、コロナ以来２年間、休校を余儀なくされています。電子機器もなく子どもたちは全く教育が受けられずにいる上、保護者の失業などにより食事もままならない状態が続いていることから、バングラデシュＹＭＣＡは今回の募金を用いて人道支援プロジェクトを実施。ＮＦＰＥに通う２３５世帯に、米１５ｋｇ、豆１ｋｇ、粉ミルク、芋、食用油、マスク、教材、文房具などを詰め合わせて配布したほか、教師に給与を払って定期的な家庭訪問プログラムを行ない、家庭での学習をサポートしました。

現地のレポートには、各家庭からの感謝の声とあわせて、配布作業に携わったボランティアの青年たちからも「支援活動を体験できてよかった。将来は地域のために働きたい」との感想が寄せられています。

国際協力募金に協力いただいた東京の皆さまへ、感謝してご報告します。

シリーズ

## 資料室の窓から〈114〉

### 「機関誌への思い」

本会元副総主事　齊藤 實

東京ＹＭＣＡの機関誌が廃刊となった時期がある。今は『東京ＹＭＣＡ』というが、さきの敗戦前は菊判雑誌型定期刊行物『東京青年』であった。戦争末期には用紙の配給がなく、諸活動もなくなって迎えた１９４４年2月、第５０４号が最終号となった。しかし、敗戦半年後の１９４６年４月には、Ｂ６版の機関紙『東京青年』復刊第1号を出し、１９５７年9月には復刊第１００号を記念した。時の総主事木本茂三郎は「論壇」で機関紙の任務に触れて言う。「現在の運動、組織を正しくくまなく伝えること・・・記録として」と。「それは、報告書式の記録でなくて、運動、組織の主張の記録である。その主張の、時代との関係が明らかにされることを機関紙の任務としたい」と。

その2年前１９５５年春に創立７５周年を記念して刊行した歴史書『七十五年・東京の青年と共に』について、著者吉川彪主事への慰労をにじませて言う。「難関は、資料の貧困ということであった。歴史資料の貧困は覆うべくもなかった」と。さらに言う。「北米ＹＭＣＡの百年史は、大半をスプリングフィールドのＹＭＣＡ大学に丹念に整理され保存されている。・・日本のわれわれがこうした努力を払ってゐなかったことに対し全く恥じ入る次第である」と。今は、東京ＹＭＣＡでは資料室に機関紙類を保存していることを良しとしたい。

その第１００号では、「機関紙を会員共通の広場としたい」と、全頁を用いて編集者と読者の声を載せた。「月一度では折角のニュースもニュースにならないので興味が薄い。生き生きとしたニュースを会員のものにするために週刊ぐらいにしたら良いと考えています」という声も聴けた。

時が進んで迎えた１９８４年4月、『東京青年』は復刊第４００号を記念した。現紙面と同じサイズの見開き2ページ全面に「復刊４００号に寄せて・みなさまの意見」を載せた。寄稿者数４８名。「『東京青年』は、東京ＹＭＣＡの戦後小史そのものです」。「ＹＭＣＡで活躍しておられる諸兄姉の《ＹＭＣＡと出会った時》とでもいった連載を期待します」と。会員相互の友愛を深める契機につなげたい思いであったろうか。

## にほんご学院スピーチコンテスト

# 日本での発見や夢　生き生きと

コロナ禍による入国制限のため、在校生が少ない状況が続く東京ＹＭＣＡにほんご学院ですが、２月10日に恒例のスピーチコンテストを開催しました。各クラスから選抜された６人の学生たちが、会場とオンラインのハイブリッド形式で、日ごろの学習成果を披露しました。

幾多のハードルを越えて日本に留学してきた学生たちのスピーチは、どれも誠実な意欲あふれるものばかりで、審査員からも「コロナ禍の日本での学びが有意義なものになるように」とエールが送られました。受賞スピーチの要旨は以下のとおりです。（広報室）

### ■最優秀賞「賢さと愚かさ」

オウ　ジヒ（中国出身）

1993年3月に起きたオウム真理教による地下鉄サリン事件を知り、私は本当の賢さは何か、わからなくなりました。サリンを作った土谷正美は筑波大学大学院の大変優秀な学生でした。でもマインドコントロールされて、人を殺してしまった。どうしたら洗脳されない賢い人になれるのか。私は「自分の視野を広げて、知見を深めること」が大切ではないかと考えました。そのために必要なのは３つ。寛容さをもち、自分と違う意見も受け容れること。本を読んで知識を増やすこと。そして旅をすること。中国には「万見の書を読み、万里の道をゆく」という言葉があります。１万冊の本を読んで、何万キロもの道を歩き、違う文化に接するという意味です。私はこの３つを心に留めて、ものごとを正確に見ることができる賢い人になれるように歩んでいきたいと思います。

### ■東京ワイズメンズクラブ賞「アニメ映画から見つけたこと」

バータル ズルヘ ウルジージャルガル（モンゴル出身）

私は９歳のときに父が亡くなり、母は海外に働きに出て、祖父母と暮らしていましたが、親戚の心ない言葉から一人で過ごすようになりました。そんなとき「グリンチ」という映画を見ました。いじめられた経験のあるグリンチですが、皆を許して一緒にクリスマスを祝います。それを見て私は、過去の出来事にとらわれていてはいけない。限られた人生、皆で仲良く暮らしたいと思いました。皆さんも過去の嫌なことにとらわれず、幸せな思い出をたくさん作って後悔のない人生を過ごしましょう。

### ■東京世田谷ワイズメンズクラブ賞「言葉の力」

グエン ティ マイ（ベトナム出身）

友だちからもらったプレゼントが自分の好みでなかった時、日本人は「あ、これはちょっと…」と言います。ベトナム人のようにストレートに「嫌い」とは言いません。日本語にはこういった相手を思いやる表現があります。「あめ」と「雨」のような同音異議語も多い。「ここで、はきものをぬいでください」と「ここでは、きものをぬいでください」のように、点の位置が違うだけで意味が変わることもある。難しいけれども面白い。もっと勉強して、気づかいのある言葉使いができるようになりたい。

## 日本ＹＭＣＡユースボランティア認証者

東京ＹＭＣＡでボランティアをしている下記の２４人が「日本ＹＭＣＡユースボランティア」として認証されました。これは①１６～３５歳で、②半年以上の活動経験があり、③ボランティアの研修を受け、所属ＹＭＣＡから推薦された方を対象とするもので、今年は全国で３１８人が認証されました。日ごろのご活躍に感謝します。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 飯塚　渓太 | 菅野　さくら | 杉崎　里紗 | 守屋　厚志 |
| 池田　健太郎 | 北澤　佳子 | 塚本　翔太 | 山浦　乃綾 |
| 池田　美貴 | 小嶋　紗生 | 福島　芽衣 | 山崎　夏実 |
| 小木曽　智哉 | 小嶋　隆寛 | 前澤　佐帆 | 大和　英理加 |
| 荻原　すみれ | 柴沼　琴子 | 間形　菜月 | 吉原　那月 |
| 小渕　和香子 | 島田　珠里 | 宮崎　澄佳 | |

（50音順）

## ユースボランティア募集中です！

ＹＭＣＡの「ユースボランティアリーダー」に仲間入りしませんか？詳細はＨＰで。ＹＭＣＡボランティア活動の魅力、先輩ボランティアの声など、ぜひご覧ください。

http://tokyo.ymca.or.jp/volunteer/volunteer-leader.html